福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus

Tempus Fugit —— 時は過ぎゆく

FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

No.07
Oct. 2024

光陰如矢 かつてと今と

神宮に響いたトランペットとバリトンの歌声

制服姿でトランペットを吹いているのは東京音楽学校生増永丈夫、歌手の藤山一郎である。彼は様々な楽器の演奏ができたが、トランペットは幼稚舎時代、変声期にノドに負担を掛けないように、という配慮で幼稚舎教師江沢清太郎の勧めで練習を始めた。さらに彼の歌声も応援文化黎明期の神宮球場に響き渡った。増永丈夫／藤山一郎の存在は、慶應義塾の音楽文化を語る上で欠かすことができない。

1932年秋、神宮でトランペットを吹く増永丈夫（（一財）藤山一郎音楽文化振興財団蔵）と、2024年春の神宮での応援指導部による演奏風景（慶應義塾体育会応援指導部提供）。

主人と3台のアコーディオン

増永いく（藤山一郎夫人）

昭和9年（1934）　福岡の水野旅館にてダラッペを手に

セッティミオはイタリー製で、主人が愛用していた3台のアコーディオンの中ではひとまわり大きく、重さは14キロもあります。でもそれを抱えて舞台に立ちますと、スポットライトを浴びて楽器全体が金色に輝き、華やかな衣装を身につけたように豪華で、観客の方々から大きな拍手が湧いたものでした。ステージではオーケストラをバックに、またはアコーディオンの弾き語りで舞台演奏に変化をつけたり、観客の不意のリクエストにも即座にお応えすることが出来る便利さに、重宝しているようでした。

戦後の一時期、アイスショーの盛んだった頃も弾きながら滑走して、プロスケーターの加藤礼子さんと一緒にデュエットを巧みにやっておりました。氷上でのアコーディオン演奏は、身体のバランスをとるのが大変難しいと申しておりました。日劇でのショーのときはローラースケートを用いて舞台狭しと滑走し、目線を足下に落とさないショーマンシップはなかなか見上げたものでした。

当時、アコーディオンは主人にとって最も頼りになる楽器で、突然の停電でも、戦時の第一線でも、焼け跡でも、1人で自由に弾きながら歌い、たちまち人の心をつかむことの出来る大切な楽器だったようです。

終戦後復員してからも、日本各地をアコ持参で駆け巡っておりましたが、60歳を超えてから、若いときのように軽々と肩にかけて演奏することが難しくなって参りました。それからはピアノとエレクトーンの2人の大変上手な伴奏者を得て、公演会形式で音楽活動を続けるようになり、愛器セッティミオは家で留守番することが多くなりました。

もう1台のダラッペはセッティミオよりやや小さめで色は白黒、見るからに軽快な感じのイタリー製で、音色の素晴らしい楽器でした。昭和18年2月、読売新聞社の慰問団として南方へ参りますとき、より軽量のダラッペを連れて船出しました。

ボルネオ島到着、翌日からギッシリ詰まった日程どおり、海軍の広大な全作戦地域をとび回り、各地に駐屯している将兵慰問にダラッペは大活躍しました。前線の仮設舞台で力の限り歌う日々が続き、音楽好きなインドネシア人との親善交流にも役立ったと聞いております。

無事約6カ月の慰問日程を終え、いったん帰国したのですが、1カ月もたたないうちに南方政府部から、今度は海軍嘱託として啓蒙宣撫の任務で再度赴任してもらいたいとの要請があり、主人とダラッペはまた出かけました。ボルネオやセレベスの島を駆け回り、宣撫活動に大いに働いたようです。

戦局の暗い噂が入るようになった昭和19年の暮れにスラバヤ行きを命じられ、また戻れるつもりで愛器ダラッペをマカッサルの宿舎に残し、身ひとつでとび立ったのです。その後戦局はますます逼迫して、とうとうアコーディオンを取りに戻ることも出来なくなり、ダラッペとはついに永久の別れとなりました。

そして新しい任地で楽器なしで途方にくれていたところ、新品のドイツ製ホーナーをどこからか見つけて下さった司政官がおられたのです。地味で飾り気のない堅牢な楽器で、以後は復員まで大活躍をして、その後も行動をともにした思い出深い楽器です。

敗戦で、日本軍は英豪連合軍に降伏する一方で、インドネシア解放軍の捕虜となって、刑務所に収容されることになります。収容所内では、沈みがちな同胞の気持ちを慰さめ元気を取り戻すために、ホーナーは大いに活躍しました。刑務所の管理者、現地人守衛たちのところにも出向いて、後に国歌になる歌インドネシア・ラヤ等を歌って仲良くなり、刑務所の中の待遇改善にも役立ったようです。

3カ月ほど過ぎてから連合軍の命令でレンパン島に収容されたとき、主人1人が呼び出されてイギリス将兵を音楽で慰問する任務を命じられたそうです。日暮れから明け方まで毎晩毎晩ホーナーを抱えて大奮闘、曲目もイギリスの民謡を主に、スコットランドやアイルランドの歌、そしてフォスターの名曲等々を工夫しながら休まず歌い続け、それはまた復員船が来るまでの淋しさを忘れたい自分のためでもあったようです。復員したときには、左手首にアコーディオンのベルトによる大きな“タコ”ができていました。

待ちに待った最後の復員船で帰るとき、イギリスの将校は主人の熱演に感謝して、捕虜であるにもかかわらず波止場まで特別にジープで送ってくれる優遇ぶりを見せ、またアコーディオンの持ち帰りも許可して乗船を見送ってくれたそうです。終戦後の大きな苦労の中で、主人はこのことに大変幸せを感じて、音楽には国境がなく、人間の心と心を結びつけるものがある、と思い出話をきかせてくれました。そのアコーディオン、ホーナーはNHKに寄贈し、今は愛宕山のNHK放送博物館に展示されています。

『YANASE LIFE』(2000年7月号)より転載

※いく夫人は2004年没。ホーナーは2024年現在は展示されていない。

応援歌『若き血』を誕生させた塾生たち

理工学部学術研究支援課
長谷坂　大樹

塾生による新塾歌の熱望

「仏西蘭(ママ)国歌は仏蘭西国民の自然の声であった。義塾の塾歌は新しい社会意識と時代精神の上に立った我々塾生からの自然の声でなければならぬ。…私達の歌は私達皆んなで作りましょう。」

『慶應義塾塾歌』、『若き血』は慶應義塾を代表する歌曲だが、その作成過程での予科会の塾生による奮闘はあまり知られていない。今回は彼らに焦点を当て、『若き血』作成の経緯を再考したい。慶應義塾では、1920年から1922年に学生数が約3倍に急増し、「塾風頽廃」と呼ばれるアイデンティティ喪失と人間関係希薄化の危機に直面した。この危機を打開するため、予科生は予科会結成と新塾歌作成を画策したのである。

予科会結成

当時の慶應義塾には、学部3年(医学部4年)の前に、予科3年の課程が存在した。しかし、予科生は「何だかバーッとして纏りのない感じ」であり、「これを打って一丸としたいという気持が多分にあった」と言われる。そこで、予科生は学部を横断する予科会の設立を構想した。しかし、医学部は1920年に予科(三田)と本科(四谷)を連絡する三四会を成立させており、「予科の僅か三年間を一緒に過すために予科全体を打って一丸とした会というものは我々はその必要を認めない」と反対した。「予科という横の連絡を考え」る予科会と「学部という縦の連絡に重きを置く」三四会の対立だったが、類似の状況にあった法学部予科生による交渉と対話により、医学部の参加が実現し、予科会は1926年6月18日に成立した。

新塾歌作成から『若き血』作成へ

設立当初の予科会では、「行詰まれる塾歌問題を直ちに解決…すべきである。…他の如何なることをおいても真先になすべき」と述べられた。当時、新塾歌作成は塾当局で進められていたが、難航し時間を要していた。しかし、秋の早慶戦は目前に迫り、一刻も早く塾生の意気を統一する象徴が求められた。

そこで立ち上がったのが、予科生の矢部勝昌である。矢部は、横山重(教員)を訪問し、「塾歌が間に合わないようだったら応援歌でもいい…出来る丈けのことはやって見て…早慶戦に臨んで歌い得るものが出来はしないか」と相談した。独自の応援歌作成には予科会内でも反対があったが、矢部は「どうしても此際歌を作らなければいけない、皆が要求して居る」と反論し、激論の末予科会は矢部に作成を一任した。そして、矢部と纐纈忠行(予科生)は10月7日に川合貞一(予科主任)の紹介で野村光一、野村により東京中央放送局にて洋楽主任を務める堀内敬三を紹介された。

予科会委員は堀内の元を訪れ、塾歌懸賞募集の作品を手渡し、「大体斯う云う歌が出来て居ります。…此の一週間ばかりの間に作って戴きたい」と依頼したという。米国の大学で学んだ堀内は後に「日本の応援歌はちっとも元気が無い。私はアメリカの応援歌のような活動的なものも作ろうと思った」と回想している。20日に堀内は野村へ完成を報告し、26日に発表された。川合への相談から発表まで、わずか約20日の出来事であった。野村が完成した『若き血』をピアノで聴かせたところ、学生たちは喜んで帰ったという。

応援歌『若き血』の作成者　予科会の塾生

『若き血』を作詞・作曲したのは堀内敬三である。しかし、予科会の塾生がいなければ『若き血』は存在しなかった。矢部は「飽くまで『塾のため』に勇敢に突進したにすぎない」と振り返る。学校からではなく、塾生の発想と行動で困難を打開する姿勢がいかにも慶應義塾らしい。次に『若き血』を歌うときには、作成者である予科会の塾生たちにも思いを馳せてほしい。

『予科会誌』第一号表紙

筆者は東京大学大学院教育学研究科博士後期課程に在籍し、高等教育論、学生歌・カレッジソングによる学生の紐帯形成を研究中。

参考文献／引用文は旧漢字を新漢字、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。また…は中略を表す。『予科会誌』第一号、1926年。『予科会誌』第三号、1927年。『予科会誌』第六号、1929年。『予科会誌』第十六号、1936年。『慶応義塾大学新聞』、1957年秋季増刊、12頁。長谷坂大樹「大正末期から昭和初期における学生の紐帯形成に関する考察－慶應義塾予科会の成立と応援歌『若き血』の作成－」『大学経営政策研究』第14号、2024年、109-125頁。

千客万来

寄せられた声から　企画展「慶應義塾と戦争 ―モノから人へ―」の感想

《印象に残った資料》疎開先から幼稚舎生が家族に送ったハガキ／学徒出陣式典で使用された大学旗／塚本太郎氏の肉声／総ての資料が重かった。貴重である。／様々な寄せ書き日章旗　小泉信三はどんな思いで書いたのか／サラワケット越えで生還した人とホロ島で戦死した人のハガキ、硫黄島で戦死した人の書簡／当時の青年たちの思いを記した書簡等。また説明書きの詳細さと丁寧さ、当時の彼らの思いが伝わりました。／石川忠雄塾長の特攻服姿には驚きました。/全て、特攻、戦争で亡くなった人、待っていた人、見ていた人の記録／塾内スキー大会昭和19年野沢での記録。当時でもスキーを楽しむ余裕、文化があったのですね。その後の塾体育会スキー部の活躍が想像されます。　**《その他意見・感想》**今、このような戦争について知り考える展示こそが重要と考えます。今回の展示をもっと長く、そして広報をして、多くの学生にみて考えてほしいです。／"戦争に美談はない"ことを慶應大学から社会に発信してほしい。美談を好む日本人気質を変えてほしい。／Very informative, love the interactive presentations as well.／潮田塾長の時に入学し、奥井塾長の時に卒業した100年三田会員としては卒業後の60年をふりかえる感慨深い展示であった。／筆跡や遺影から緊迫した感・その他諸々よく伝わって来ました。／所蔵資料の豊富さに驚きました。一点一点の資料の解説も充実していて見ごたえがありました。展示の主旨である「継承可能性」についても考えさせられました。／中国、南方、シベリア、沖縄、硫黄島、真珠湾と広範な戦地、時期のものがそろっているのが印象的だった。慶應という断面でも戦争が誰をも逃さず覆ってくるのだと思った。非常に珍しい資料と、シベリアのスプーンや、妹の描いた遺影、石ころといった個人的に貴重なものを同列に扱っているのが良かった。／慶應を目指すきっかけが今回の展示のような戦争に関わる取組でした。改めて、展示をみて自分のできることを考えるきっかけとなりました。／もっと読める様に大きいコピーなどしてほしい。小さすぎ(暗すぎて)読めない／戦犯として処刑された方の事をもう少し知りたいと思いました。／収集、保存のされたものは、多種多様と思います。断片的な(情報の)ものも、今後少しずつ紹介していただければと思います。／亡父は福澤先生の没年1901年に生まれ、69年の生涯を送った。不思議なご縁を感じる。慶應義塾の益々の発展を期待しています。／古い文章、日本語のモノを理解することができない。解説文や現代語訳があると助かります。より学べます。／今回は土曜日に訪問させていただきましたが、出来れば日曜日も開館して欲しいと思います。例えば、隔週や月1から2回程度でも構いません。／私、沖縄県の中高の校長をしている者です。今年も何名かの生徒が慶應の"幻の門"をくぐりました。大学でのご指導を宜しくお願いします。本校出身の生徒達は幸福者です。／記録、手紙、日記の展示をありがとうございます。他のページも読ませて頂きたいのでデジタルの記録、本などにしていただけたら嬉しいです。読んで考えたり感じたり理解したりしたいです。色々な考えの方がいらっしゃると思います。当時の上原良司さんの考えにおどろき感動いたしました。

企画展示室の今後の予定

慶應義塾福澤研究センター
新収資料展2025
2025年1月10日(金)～2月8日(土)

慶應義塾史展示館の図録

『福澤諭吉記念
慶應義塾史展示館
開館記念図録』

A4判　24頁
2021年7月4日発行
800円

『慶応四年五月十五日
―福澤諭吉、ウェーランド
経済書講述の日』

A4判　76頁
2021年10月9日発行
1200円

『福澤諭吉と『非暴力』
―学問のすゝめ150年―』

A4版　68頁
2022年11月30日発行
1100円

『曾禰中條建築事務所と
慶應義塾』

A4版　176頁
2023年11月30日発行
2800円

『慶應義塾と戦争
――モノから人へ――』

A4版
2024年10月発行予定

当館常設展示室受付、カフェ八角塔、
三田インフォメーションプラザのほか、
慶應義塾公式グッズサイト (https://keiogoods.jp/)
からもお求めいただけます。

基本情報

開館年月日　2021年7月5日
空間デザイン　槇総合計画事務所
展示設計製作　株式会社トータルメディア開発研究所
床　面　積　常設展示室：280.44㎡　企画展示室：60.99㎡

スタッフ一覧

館　長／平野　隆　　副館長／都倉　武之
所　員／西澤　直子、阿久澤　武史（兼運営委員）
所　員／クラシゲ, ジェフリー ヨシオ、小山　太輝、齋藤　秀彦、末木　孝典、山内　慶太、結城　大佑
専門員／横山　寛　　事務局／福澤研究センター 兼務

来館者数

2024/5	2024/6	2024/7	2024/8	2024/9
2241名	2568名	3064名	5560名	1885名

諸記録

6月18日～7月20日	2024年度春季企画展 慶應義塾と戦争 ――モノから人へ――　前期
6月19日	2024年度　第1回所員会議
6月27日	ギャラリートーク
7月1日～12月31日	特別出品　新紙幣発行記念　関連資料(一部は8月31日まで)
7月17日	2024年度　第1回運営委員会
7月18日	戦争遺跡としてめぐる三田キャンパスツアー
7月24日～8月31日	2024年度春季企画展 慶應義塾と戦争 ――モノから人へ――　後期
7月25日	日吉台地下壕見学会　1回目
7月27日	10万人達成 記念品贈呈
7月31日	ギャラリートーク
8月2日～8月31日	特別出品　大日本蹴球協会杯
8月 2日	2024年度　第2回運営委員会
8月 3日	日吉台地下壕見学会　2回目
8月19日～12月末予定	特別出品　ヤタガイツノセンチコガネ

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより
Tempus（テンプス） No.07

発行日　2024年10月31日(年2回発行)　　印刷　(有)梅沢印刷所
編集・発行　福澤諭吉記念慶應義塾史展示館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　電話 03-5427-1200　https://history.keio.ac.jp/

各種SNSはこちら　@keiohistory　@keiohistory　@keio_history